

徳山藩士飯田厚蔵の書簡を読む

會員 岩本 勝

この書簡は徳山市旧栗屋村の旧家温品昭三氏宅で、古記録の探訪の機会にたまたま発見したものである。温品氏は数戸あるが、当家は、かの堀川運河開鑿の功労者孫四郎、又長岡外史將軍の父で第二奇兵隊參謀として幕末に活躍した室津の小方謙九郎の生家でもある。

書簡は飯田厚蔵から頼又次郎（頼山陽の次男）に宛てた書状で、それが当地に於いて発見されたことは、如何なる経緯で所蔵されていたのであろうかと不審に思われた。

同家には古い書籍箱があつて、その中に部厚な「古文典刑」天地二冊（写真1）が収納されていた。書状は、この「古文典刑」の内に缺まれていたのである。

頼又次郎は文政六年（一八二三）頼山陽の二男として生まれ、号は支峰、後に東京大学教授となる。明治廿二年に没した。弟に頼三樹三郎。

飯田厚蔵は徳山藩馬廻格、禄百五十石、幕末には保守派

として正義派に対したので、藩論一統の後は見島に流罪された。明治政府となって許されて帰徳したが、前原一誠の挙兵に加担したので国事犯となり七年の刑に罪せられる。明治十三年六月廿七日没す。年四十九歳。

この書状は両者の交友關係を知る一資料で、次の通りである。

今春二月二日御緘之華状同三月下旬相達し捧読奉り候。命の如く未だ芝^{注1}眉に接せず候え共時下隆寒愈々以て御満館揃いなされ御清福御座成さる可く賀し奉候。然れば昨冬上國え罷り出候節は、大垣辺御出浮^{注2}中にて拝晤を得ず誠に以て残憾此事に存し候。扱爾来天下の形勢は日々変遷^{注3}浩歎も疎に御座候処、客冬令弟の御一条は言うに忍ざる次第嘸々老台の御痛み万々推察奉り候。大橋氏両三人の処置は定めて止むを得ざる至情の義に之れ有る可く、何も格別御

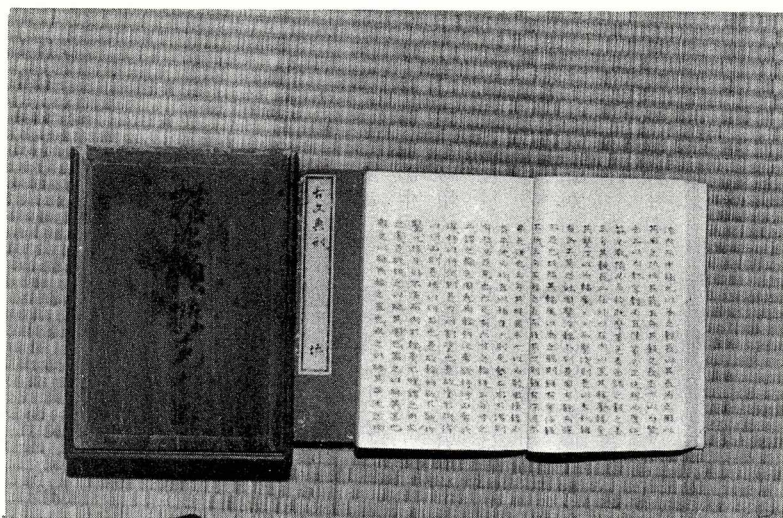


写真1 古 文 典 刑

謝の入り候訳には御座有る可からずと存じ奉り候。況や小子輩何の周旋御座候てと可受御謝の義候哉。却て縷々御懸辞を蒙り候て万々痛み入り奉候。且存じ寄らずも尊弟御手写の古文典刑一部御患投下され、何共御厚情の至り謝す所知らず候え共、折角貴弟の遺愛物に御座候えば、平生對面の想をも成り候様相覚え、又々戚々焉動情候。此の一部は有難く受け奉り永々珍藏仕る可く候。

今春より早速御礼酬方々慎み奉り呈し奉り仕る可き筈に御座候処、其頃余義無く叔父方相續旁多忙に取紛れ其後家内並びに親類中数々不幸事に會ひ、当節も朦中に罷り在る候次第、存外乍ら心外の御無沙汰に打ち過ぎ申し候段、平に御海恕下され置偏に頼み上げ奉り候。頃日御地は何様の様子に御座候哉案じ候、牧宮原並びに立島事等の諸先醒相変らず御盛に御座候哉、客冬は大いに御世話に相成り有難く存じ奉候、夫々寸簡拜呈す可き筈に候処其義も止む得ず、何卒御序御座候は、万々憚り乍ら御伝声然る可く頼み上げ奉り候、情事万般不一不尚後音に托し奉り候、先づは御春の御禱旁此くの如く御座候、光陰匆々道の為御自重を是祈る 草々謹白

十二月十日

頼又次郎 様

硯北

飯田厚蔵 拜

二陳、粗毫一對呈上仕度く御察留^{注4}下されば辱く存じ奉り候。尚筆末に相成り候え共客冬は内事様に拝顔を得、其の節は宿許迄御丁寧に御挨拶下され有難く存じ奉候。惴り乍ら然る可き様御伝言以って希い奉り候。以上

注1 芝眉 シビ 人の顔の美称

注2 出浮 シュッフ 出あるく

注3 浩歎 コウタン 大いに歎く

注4 察留 サンリユウ 白け米 添削する

次に書状の口語読みを掲げる。

今春二月二日のお手紙、同三月下旬に受け取り、

拝読致しました。

仰せの様にまだお逢い致しませんが、厳寒の折柄御館も愈々お揃いなられど隆昌のこととお喜び申し上げます。然れば昨冬そちらに参りました節は大垣方面にお出かけ中にてお目にかかる事が出来ませんでした。大変残念に思っています。今頃天下の状況は日増しに変わり大変歎かわしい次第で

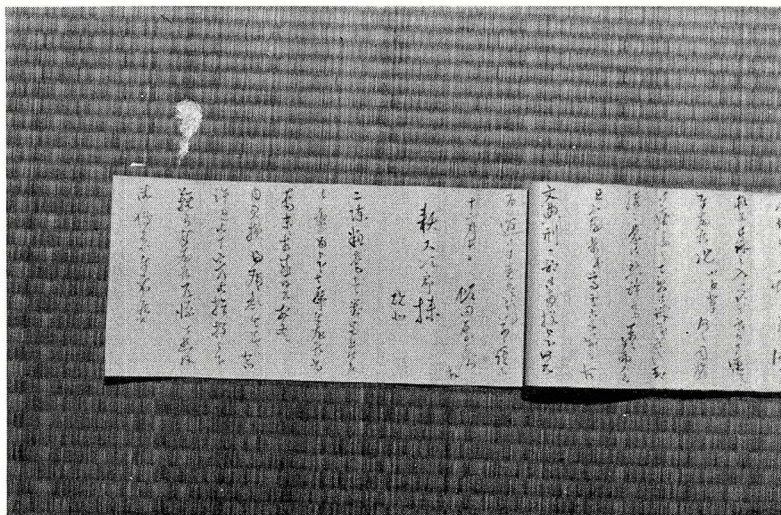


写真 2 飯田厚蔵の書状（末尾）

あります。昨年冬の御令弟の一件（頼三樹三郎が安政の大獄で処刑された）は誠に気の毒な事で大変ご心痛の事と推察致します。

大橋氏等二、三人の行為は（三樹三郎の墓碑を小塚原に建てる）本人等の止むに止まれぬ至情によるもので、何も格別に謝することもあるまいと思いません。不肖私も何んの事もできないのにどうして礼を受けられましょうか、却って色々御言葉を頂き誠に痛み入ります。はからずも弟様（三樹三郎）のお手写しの古文典刑を一部頂き何とも有難くお礼申し上げます。折角の弟様のお遺愛物でありますから、平生対面の想いもなる様に思われ又いつも心を動かされる様です。この本は有難く頂き大切に致します。今春より早くお礼を申し上げるべきところですが、その頃余儀なく叔父の家を相続し多忙で又家内や親類中にも不幸事がありまして、今も気がすぐれない様な次第です。思わぬ御無沙汰を致し申し訳ありません。何卒お許し下さい。今頃御地は何様の様子ですか案じています。牧宮原や立島等の先輩は相変わらず一生懸命やっていますか。昨冬は大変お世話様になり有難うあ

りました。お手紙を差し上げるべき筈の所それもできなかったので、何卒ついでの時によりしくお伝え下さい。何事も不行届きでしたがまたお手紙を差し上げます。先ずは御春の慶びをかね此くの如くであります。

ご自重をお祈り致します。

敬具

十二月十日

飯田厚蔵拜

頼又次郎様

硯北

二陳 粗末な作詩の一对差し上げたいと思えます。ご添削下されば有難く思います。最後になりましたが、昨年冬に奥様にお逢いした節は、宿迄ご丁寧にお出下され有難く思っております。はばかり乍ら何卒よろしくお伝え下さい。 以上

編者注 書中の「昨冬」は、安政六年で、

この書状は万延元年二月一〇日付となる。